

ラブズ  
Love's 2

——篠原愛は、素敵な人と出会った。

彼の名前は奥宮楓。レストランやバーを経営する青年実業家で、海里グループという、飲食業界でも有名な会社の代表取締役だ。

それだけでなく、人気店の空間プロデューサーを手掛けるようなすごい人。

しかも、フランス人と日本人のハーフである彼は、顔立ちが綺麗で整っており、中でも目の色が美しかった。緑にも見える茶色の瞳の中心を金色っぽく見える光彩が縁取っている。

まるで花が咲いているような、美しい瞳だった。

身長も高く、明るい色合いの柔らかな髪をしていて、絵本から抜け出した王子様みたいな容姿をしている。

神様は彼に、二物も三物も与えたのではないかと思うほどだ。

そんな彼と愛が初めて出会ったのは、兄の結婚式の二次会の時。愛はよく覚えていなかったが、彼は愛のことを覚えていた。

その理由が、一目見て愛のことが気になっていたらだと聞き、戸惑った。

当時、失恋したばかりだったのに、なぜか彼に誘われるままデートをした。いろいろな話をするうちに、彼の誠実な生き方や考え方に触れ、愛も少しずつ楓に惹かれていった。

そして愛は、彼と付き合うことになったのだ。ちよつと前まで好きな人がいたのに、それを上回りすぎるほど、楓のことが好きになってしまった。こんなことがあるんだと、自分の心に驚いてしまった。

何をしていても、楓のことばかり考えてしまう。

それでようやく、自分は本気の恋をしているのだと気が付いた。

異性と付き合うのは初めてで、彼に全てを見せることに抵抗があつたけれど、彼の優しさや気遣いを感じて、愛は彼に抱かれた。

楓は最後まで優しく、恥ずかしかつたけれど、これほど幸せだと感じたことはなかつた。

この人のことが誰より好きだと、これが本当の恋だと、心の底から実感する。

ずっとこの幸せが続けばいいのに……

恋人になつたばかりだというのに、愛はそう願わずにはいられなかつた。

☆ ☆ ☆

目を覚ますと、緑茶色の目と視線が合った。

瞬きをしながら、緑茶色の目をじつと見て、愛は自分の状況を思い出す。

新しい年が明けたその日、愛は楓に誘われて、見るからに高級そうな料亭の個室を訪れた。そこで食事をし、そのまま宿泊施設を兼ねた離れの部屋に泊まつたのだ。

元日で着物を着ていた愛は、一人で着られないから、と拒んだけれど。

着付けてあげると言う彼の言葉と、愛を欲しがる甘い言葉。それに何より、彼を好きな気持ちがあつて、愛は楓を受け入れたのだつた。

「……っ！ 寝顔、不細工なのに」

咄嗟に布団をかぶるが、笑つた彼にその布団を剥ぎ取られた。

「可愛かつたよ、愛。君、うつ伏せで寝るんだね。この前もそうだつた」

大きな手で愛の頬を撫で、顔を上げさせる。彼の長くて綺麗な指が、愛の前髪をそつと掻き分けた。

「絶対可愛くないし。もうっ、楓さん、じつと見ないで！」

寝顔のどこが可愛いのかと、楓から顔を背けるが、再度彼の方に戻された。

「楓、だよ。愛」

呼び方を正されて、ああそうか、と思ひ出す。

『愛には、そう呼ばれたい』

自分の名前が好きだと、愛に名前を呼んでもらいたいと言つた楓。これまで男の人の名前を呼び捨てにしたことなんかないけれど。

「楓」

「はい」

楓は、嬉しそうに笑みを向ける。彼は朝から王子様だった。寝乱れた柔らかそうな茶色の髪の毛が、布団の上に散っている。

愛の真つ直ぐな髪と違って、猫っ毛のようだ。

綺麗で爽やかな笑顔は、見る者を魅了し、目が離せなくなる。

こんな人が、愛の恋人だと思つくと、ドキドキした。

「お風呂入る？」

「そ、そうですね」

昨日は入浴もせずに楓に抱かれた。そういえば、一度目もシャワーを浴びなかった。

愛としては、せめてシャワーを浴びてから愛し合いたい、と思つけれど。

「……こういうことする前に……シャワーとかしたい」

愛が小さな声で言うと、そうだね、と言つて楓に首筋を撫でられた。

「でも、シャワーの後の清潔な香りもいいけど、愛自身の肌の香りの方がいいけどな」

大きな温かい手で首筋を撫で、楓がそこに鼻先をすり寄せる。

「……っ……私、の？」

鼻先をすり寄せられた肌が粟立ち、愛は息を詰めた。

「君の、肌の香り。香水と混ざつて甘い香りがする。どこの香水をつけてるの？」

「香水なんて、つけてないですよ！ ……あ、えっと、パウダー？ 軽く、胸元にいい匂いにする

粉をポンポンツて、するだけ」

いい匂いにする粉は、外国製。アメリカに旅行に行った、兄の妻のお土産だ。甘いけれど、甘いだけではない香りがとても気に入っていた。

全部使いきったら、今度は自分で取り寄せようと思つている。

「そう。じゃあ、ほとんど君の香りなんだね」

そう言つて楓は、再度首筋に顔を埋めた後、鎖骨にも鼻先を近づけた。

「あ……っ」

「甘い声……その声、好きだな」

クスツと笑つて、鎖骨にキスをした彼が、顔を離して愛を見た。

「お風呂入ろうか。檜風呂だよ」

そう言つて布団から起き上がった楓の、均整の取れたしっかりした身体。

細身ではあるが、やはり外国の血が入つていと思わせる体軀で、肩のあたりや背中には自然な筋肉が綺麗にのつている。

本当にどこもかしこも王子様だな、と感心して彼を見てみると、旅館の寝巻に袖を通した楓に、身体を引き起こされた。

「起きて、行こう？」

にこりと微笑んだ顔が眩しい。

けれど、彼の言葉に内心で首を傾げる。まさか、一緒にお風呂に入るなんて思わない愛は、聞き

返した。

「へ？ あの、私も？」

「そうだよ」

「いや！ 私は後で！」

男の人と一緒にお風呂に入るなんてあり得ない。そんな恥ずかしいこと、みんなはしているんだろうか？

「恥ずかしいけど、こっちは恥ずかしくなる。大丈夫、おいで、愛」

「いや、でも」

なおも躊躇う愛の耳に唇を寄せ、楓が囁いた。

「君の裸は、全部知ってるよ」

朝からそんなことを色気たっぷり言われた愛は、クラツとする。確かに見られているだろうけれど。

「愛、お尻の骨の頂点に、黒子あるの知ってた？」

布団を引き寄せて、身体を隠していると、ここに、と臀部に楓の手が触れる。

「君に見えない場所も僕は知ってるのに、恥ずかしいの？」

そのまま愛の腰を撫でてくる手に、ん、と声が出る。

甘い声が恥ずかしい。

「行こうよ、愛」

そう言っつて、裸の肩に寝巻をかけてくる。

ゆっくり瞬きをして愛を見る仕草。

これがわざとではなかったら、この人は天然のタラシだ。

「……身体、だるいです」

寝巻に袖を通してながら言うど、楓がいきなり愛の身体を抱き上げた。

「きゃっ……！」

「これならいい？」

こうして彼に抱きかかえられたことは何度かあるけれど、愛としては自分の体重が気になってしまっただけ。

「重いでしょ？」

「うーん、そうでもない」

細身ながら楓の腕には綺麗な筋肉がついているので、抱えるのは大丈夫なかもしれない。けれど、このまま裸になっつて一緒にお風呂は、やっぱり恥ずかしい。

そんなことを考えているうちにお風呂場に着いてしまい、目の前に露天の檜風呂が見える。

愛を下ろした楓は、躊躇いもなく寝間着の腰紐を解いた。寝間着の下の裸体を惜しげもなく晒して、タオルを手取る。

「先に行ってる」

楓の全ては、愛も見知っている。けれども、こうして間近で見ると、やっぱりドキドキするし、

自然と目がある部分にいつてしまう。

軽く頭を振って彼から視線を逸らし、寝間着の腰紐こしじむを解いた。

そしてタオルで身体を隠して、湯船に向かう。

かけ湯もそこにさつさと湯船に入る。けれど、身体はタオルで隠したままだ。本当は湯船にタオルはつけてはいけないのだが、目の前の楓が気になってタオルを外せなかった。

「日本で育って、フランスに行った時、シャワーだけは慣れなかったな」

楓を見ると、彼は湯で顔を洗っていた。

「こうやって、しっかり湯に浸かることができなかったから、日本に戻った時ホツとした」

黙って聞いていると、楓に愛、と呼ばれる。

「おとなしいね、どうしたの？」

どうしたの、ってわかるでしょ？ と内心で呟き、顔を少し横に向ける。

「いや、別に……」

男の人と一緒に風呂に入るなんて、考えたこともなかったし。

なのに、付き合うことになって一ヶ月くらいで、キスをしてエッチをして、お風呂まで一緒に入っている。

恋愛経験皆無の愛にとつては、びつくりするくらいのステップアップだ。

キスもエッチも知らなかった自分が、楓に導かれるまま一足飛びで大人になってしまっている。

恋とはこういうものだろうか、といつも思う。

世の恋人たちも、みんなこんな風に、一気に大人の関係になっていくのか。

楓も愛と付き合う前に、恋人とお風呂に入ったりしていたのだろうか。

まったく躊躇ためちいがないし、前の恋人とも同じようにしていたのかもしれない。

そう考えたら、なんとなくモヤモヤして、楓の過去の恋人に嫉妬してしまう。

無意識にムツとした顔になっていると、頬に大きな手が触れた。顔を上げると、楓がこちらに近づいて来るのが見えて、瞬まばたきをする。

「緊張してる？」

肩を抱きしめてくる彼の手は、湯に入ったせいかわかい。

「……初めて、だからですね。楓さ……楓は、慣れているでしょうけど」

横を向いたまま、つい含みを持たせた言い方をしてしまう。すると、愛の鎖骨に指で触れながら、楓が少しだけ笑う。

「愛の初めては、全部僕なんだね。とてもラッキーな男だ、僕は」

そうして愛の身体をさらに自分の方へ引き寄せる。あつという間に、愛は湯の中で楓の膝の上に乘せられていた。

「こ、このエッチな体勢、やだ」

「何もしないから、このままでいて、愛」

ね？ と王子様スマイルで言われて、愛は楓の肩に顎あごを乗せ、力を抜く。

「この後、初詣に行こうか？ 初詣なんて久しぶりだ。ここ数年、ずっと忙しくてね。去年の夏く

らいから、ようやく少し楽になった。思えば、愛に初めて会った頃くらいかな？」

優しく背を撫でられて、水音が響く。

「今年は大丈夫なの？」

預けていた身体を少し引いて、楓を見る。

「大丈夫だよ。ある程度忙しいのはしょうがないけど、色ボケかな？ 君のことを考えたりすると、結構手を抜いちゃうんだ。でも周りからは、それくらいいいって言われた。今までが頑張り過ぎだった」

愛の髪の毛に触れていた楓が、そういえば、と、こちらをじつと見てくる。

「髪の毛、切ったんだね？ どうして？」

「楓、気付くのが遅くないですか？」

本当は、昨日会った時、一番に言われると思っていた。些細な変化でも、気付いてほしいのに、と思っていた。

「気付いてただけけど、言うタイミングがなくて……。愛に会えたことの方が、嬉しかったから。着物姿が可愛いと思って」

そう言って照れくさそうに笑う楓が可愛くて、なんだかズルい。

「それに、昨日は、久しぶりに会うから緊張してて。……愛を誘うのに、すぐくパワーを使った気がする。帰るって言われたらどうしようって、ずっと思ってた」

「そんな」

けれど、昨日はちよつと驚いた。

こんな高級な場所に来たのは初めてだし、しかもそのまま泊まるなんて思わなかったし。着物を脱がされて、意識が飛ぶまで楓に抱かれて。

「好きな人を抱くって、幸せだ」

にこりと笑う王子様。誰だってこんな顔を見たらクラツとする。唇を寄せてくるので、それに応えるように目を閉じる。

深いキスが、当たり前前になってきた。楓の舌に応えるのに、慣れてきている自分がある。

「ん……っ」

「愛、好きだ」

彼の言葉が、心にも身体にも響く。

愛は、それに応えるように楓の首に腕を巻き付け、抱きしめた。

再会してから、それほど経っていないのに。こんな風に恋に落ちるものなのか、と愛は内心首を傾げる。

楓の言葉にも、笑顔にも、そして身体にも感じてしまっている。

そうなるのは、きつと相手が楓だからだろう。

こんな人、もう現れないと思つた。

だからこそ、愛の恋愛指数はどんどん高まっていく。

これほど好きになれる人と出会えたのは、愛にとつて幸運だった。

本気の恋をしている。だからこそ感じるのは、離れたくないという気持ち。そして、少しも揺るがず、はつきりと思うことがある。

それは——この人しかいない、ということだった。

☆ ☆ ☆

風呂から上がった、襦袢じゆばんを着付けてもらう時、目の前の楓がふつと笑った。「どうして笑うの？」

彼は膝立ちになり、襦袢じゆばんの左右を持ちながら、愛のショーツに軽く触れた。

「いや、今日はレース系の下着だなんて思っただ。ハワイで脱がせたパンツは、キャラクターだったから」

確かに、彼と初めてエッチをした時、愛が着けていたのはキャラクターものの上下セットだった。色気も何もない下着だったのは、まさか仕事で同行した旅先で楓とそういうことをするとは思わなかったからだ。下着に気を遣ってなかったのは、しょうがない。

クスツと笑った彼は、襦袢じゆばんを愛に合わせてながら見上げてくる。

「も、やだ！ 今更、言うこと？」

顔を赤くする愛に、楓は首を振って可笑おかしそうに笑った。

「いや、可愛いなと思っただ。下着も可愛かったしね。……なんか、若い子を抱いたって、実感が湧

いたよ」

話す間も、楓は襦袢じゆばんの丈を合わせて腰紐こしひもを結び、愛の胸元を綺麗に整えた。

「ああいう下着は、締め付けがなくて楽そうだな、と思っただ」

朝起きて、きちんと綺麗に畳んで置いてあるキャラクターものの下着を見て、恥ずかしくて堪たまらなかった。

「子供っぽくてすみませんでした！」

「どうして怒るの？ 可愛かったのに」

彼は着物を着付ける手を止めず、慣れた様子で紐ひもを結んでいく。

「だって、恥ずかしくなかったし。キャラクターものなんて、子供みたいでしょ？」

楓はそう？ と言っただ、ハンガーにかけていた着物を愛に着せる。

「どんなデザインでも、好きな子の下着を脱がせる時は、緊張と興奮でドキドキするよ、僕は」

後ろから着物を着せかけながら言われた言葉に、愛の方がドキドキしてしまう。愛を裸にする時、彼はそんなことを思っていたのか。

今はどうだろう。着物を着せながら、何を思っているのだろう。

襟えりの部分に伸ばされる手や、袖そでを直される時に触れる指先に、愛はドキドキしている。男の人に着付けてもらっているからなのか、それとも楓だからか。

一枚一枚、重ねられているのに、なぜか脱がされているような錯覚を覚える。

「紐ひもの結び方、苦しくない？」



ひざまずいた彼に見上げられながら問われる。おかしな妄想を振り切るために、愛は彼から目を逸らして小さく頷いた。

「大丈夫」

男の人なのに、着物をスムーズに着付けていく楓は、いったいどこでそれを身に付けたのだろう。「自分でも、着物を着たりするの？」

「いや」

「じゃあ、どうして女の人の着物の着付けができるの？」

楓は、愛の襟元に指先を触れさせたまま、やや間をおいて問いに答えた。

「……母に、着せてあげたことが何度もあるからだよ」

そうして、にこりと笑う。

「あまり上手くないけどね」

楓はそう言うけれど、上手だと思う。愛の後ろから帯を回し、締め上げる強さもちょうど良く、苦しくない。もともと半幅帯だから結構楽なのだが。

「できたよ」

ボンと軽く帯を叩かれて、後ろにいる楓を見ると、満足そうに笑みを浮かべていた。

「久し振りだけど、上手くできたかも。綺麗だよ、愛」

本当に臆面もなくそういうことを言ってくる楓に、顔が火照る。

綺麗だなんて、男の人は面と向かって言ったりしないだろう。

「本当に綺麗だ。もう一度、脱がせたくなくなるくらい……」

そう言って少し声を出して笑って、愛の着物の合わせ目を指先でなぞった。その指先が、合わせ目の中にほんの少しだけ入ってくる。

胸に触れるとかではなく、ただそっと合わせ目に指が入っただけなのに、愛は心臓が跳ね上がった気がした。

一足飛びに、大人の雰囲気<sup>たふよ</sup>が漂う。

愛は今、楓に意味深な誘惑をされている。

ついこの前まで、恋愛なんて本当の意味で知らなかった。だから、異性に触れられることが不快ではなく、喜びになるなんて思いもしなかった。

ただ着物の合わせ目に触れるだけのことが、こんなにエロティックになるなんて思わない。

「初詣……行く、んでしょ？」

言葉に詰まりながら言うと、彼は愛の首筋にスッと触れた。

「そうだね」

「夜は用事があるって……」

二人でお風呂に入っていた時、彼は夜に約束があると言っていた。だから、初詣に行った後は、帰るものだと思っていた。

別れるのがなんだか寂しい気もするが、用事があるのなら仕方がない。

「うん。でも、夜までまだ時間があるから、近くに初詣に行つて、あとはどう過ごそう？」

どう過ごそう、と聞かれても返答に困る。

ずっと一緒にいると、離れがたくなりそうだ。

「私は、家に帰る……」

「それはなんだか寂しいな」

本当に寂しそうに楓は眉を下げて言った。

楓も同じ気持ちでいることを嬉しく思う反面、時間はもう、朝の十時になろうとしている。

夜の約束が何時からなのかわからないけど、初詣に行つた後は帰つた方がよさそうだ。楓に約束がなかったなら、正月休みなので、明日まで一緒にいられたかもしれないけれど。

そんなことを考えている自分に、愛は内心で首を振る。自分は、初めての真剣な恋に、随分と色ボケしているのかもしれない。

愛がいろいろと考えを巡らせていると、楓が思いついたように、あ、と言つた。

「初詣の後は初売りに行こうか。君に服を買つて、そのまま僕の家に行こう……」

「私の服？ それはちよつと遠慮を……」

楓にとつては軽いプレゼントのつもりかもしれないが、そんなにしてもらつていいのかという遠慮が先に立ち、首を振つて断ろうとした。

しかし、全てを言えなかつたのは、彼が愛を後ろから抱きしめ、着物の合わせ目をなぞり、スツと手を入れてきたからだつた。

彼の手が愛の乳房に直に触れ、軽く揉み上げる。

「服を買つたら、着物を着なくてもいい……これを脱がせても、困らないよね？」

「そ、そんなこと……」

昨夜、あれだけ熱く愛し合つたのに、楓はまだ愛が欲しいという。

それに、服を買う理由が、エッチなことをするためなんて。

「昨日、二回も、したのに？」

愛は彼の腕からそつと抜け出ると、彼を見上げる。

「なんだか今日は、君と離れたくないんだ。約束の時間まで、一緒にいてほしい」

彼は切実にそう願っているような顔をした。なんでそんな顔をするんだろうと思つた。

「セックスが目的みたいに思われても仕方ないけど、抱きしめていると、君をより近くに感じられて……僕の大切な人だと、実感できるんだ」

いつもの笑顔を向けてくる彼に、ドキドキする。楓は本当に、愛を抱きたいと思つているようだつた。

彼に大切な人だと言われるのは、愛も嬉しい。

でも、行為をまだ恥ずかしいと思うのは、どうしようもない事実で。

「……もうしたくない？」

その声だけでなんだかダメになりそうだった。彼の声はいつも甘く響き、なんでも言うことを聞いてしまふようになる。

愛を大切にしてくれるとわかつているから、余計にそうなつてしまうのかもしれない。

「……だって、夜に約束があるなら、初詣に行った後、少し休んでからの方がいいんじゃないの。お酒とか、飲むんでしよう？ だったら別に、今日じゃなくても……」

「離れがたいんだ。君の体温を感じたい」

楓は本当に愛がくらくらするような言葉ばかり言う。けれど、このまま彼と過ごしても、約束があるならずと愛の傍にいてくれるわけじゃない。

「でも……」

「じゃあ、ここで脱ぐ？ もう一泊しようか。夜、用事が終わったら戻ってくるから」

とてもいいところではあるけれど、こんな場所にもう一泊なんて、とんでもないことだ。

さすがに贅沢ぜいたくすぎる。

それに、離れがたいと言ってくれるのは嬉しいけど、それなら、夜も一緒にいてほしいと、愛の方が離れがたくなってしまう。

「今、楓、と抱き合ってしまったら、夜の約束は取り消して、って言ってしまうそうになるから……ダメ」

首を横に振ると、身体を引き寄せられてキスをされた。

「約束は取り消せないけど……たとえ離れても、君が僕を忘れないくらい、夢中にさせるから」

楓が首筋に顔を埋め、耳の後ろにキスをする。身体が震えて、肌が粟あわた立ち、愛は下半身が疼うずくのを感じた。

こんなに甘い楓からの誘いを、愛はもう流せない。

なぜなら、愛もまた、彼とそうしたいと思ったから。

「本当に？ 恥ずかしさを感じないくらい？」

「約束するよ」

彼の綺麗な目を見るだけで、身体が蕩うたけてしまいうそう。

「初詣に行った後、僕の家で過ごそう。いい？」

愛は頷いて、彼の極上の笑顔を見つめる。

口ではいろいろ言いながらも、結局のところ、愛も彼に抱かれることを心のどこかで期待していたのかもしれない。

なぜかというところ、この後、彼の家に行くことばかりを考えていたからだ。

初詣に行き、お参りしながら、やっぱり夜も一緒にいたいと思っていた。初売りで服を買っている最中も、心は上の空で、彼の家に行くことを考えている。

移動の間は、夢中にさせると言った言葉を思い出し、顔を赤くしないようにと必死だった。

楓のマンションに着き、鍵を閉めるとすぐに、彼は愛の胸元を開いた。そしてベッドルームへ連れて行かれる。

初めて見る楓のベッドルームは、広い部屋にシンプルすぎるベッドが置かれていた。

「楓、あの……っ」

「黙って」

そう言って、愛の着物の帯を解いていく。

自分で着せた着物を、自ら脱がすなんて。これでは最初に巻き戻し。

「好きだ、愛」

熱く囁いて、彼は愛の胸に顔を埋める。

出会った時は、こんなに濃い時間を過ごすとは思わなかった。

こんなに熱い時間を過ごすとも思わなかった。

愛は甘い声を出して、着物を脱がされて、楓の熱い吐息を近くで聞くのだった。

2

奥宮楓は、馴染みの老舗旅館へ、一泊二日の予約を入れた。

もちろん、豪勢な料理と美味しいお酒を用意してほしいと付け加える。

『泊まるの？ しかも離れに？』

「……まあ、そうだけど」

『いったい誰と？』

電話口で興味津々に聞かれて、誰とでもいいだろう、と言って電話を切った。

相手は大学の同級生である藤野利佐。

彼女は老舗旅館としても有名な藤野屋の実質的な四代目である若女将だ。

数年前から毎年、欠かさず年賀状をもらっていることもあり、一年に一回は食事に行くようにしていた。

その時は、余計なことを詮索される前に、適当に言葉を濁して電話を切ったのだが、当日、離れに案内されるとすぐに利佐が挨拶にやってくる。

「今まで、泊まったことなんて一度もないのに。それが二名様で予約だからねえ。彼女？」

テーブルの上に料理を並べ終えた後、利佐は早速とばかりに詮索してきた。

「そのニヤニヤした笑い、やめてくれる？ 彼女以外の誰と泊まるんだよ」

横を向いて言うと、利佐は声を上げて笑う。

「どんな人？ 私、挨拶していいよね？」

若女将である利佐が、客に挨拶するのは当然だ。

眉を寄せて利佐を見ると、どことなく意地悪な笑みを浮かべていた。

楓はため息をつきながら、髪の毛を掻き上げる。

「若女将だから当然でしょ？ ていうか、まだ僕は挨拶されていないけど？」

「えー？ してほしいの？ 今更？」

明らかに面倒くさそうな顔をして、こちらを見てくる。

「するもんでしょ？ 普通は。僕も客の一人だよ？」

「はいはい、いらっしやいませ、奥宮君」

「感情がこもってないなあ。大学時代、食事を食べさせてもらったり、いろいろ世話になったから

こうして来てるのに。正規の値段だと、本当にお金かかるよね、ここ」

楓が藤野屋に初めて来たのは、大学に入って半年くらいの頃。

当時、経済的にピンチだった楓に、同じサークルにいた利佐がうちでご飯食べなよ、と言ってくれたのが最初だった。

「一年に一回くらいで、みみっちいわよ。それより、どんな人？」

興味がある、という顔をしている利佐を見て楓は面倒そうに眉を寄せた。

「……若くて綺麗な子」

声が少し小さくなってしまった。「若くて綺麗な子」と称した楓の彼女は、その言葉通りの人だ。自ら経営するレストランで初めて見た時、一目で恋に落ちてしまった。

綺麗で、でも可愛くて、素直そうな笑顔の人。

第一印象で、心惹かれた彼女は、その印象通りの人だった。

「若くて綺麗？　いくつ？」

「二十四歳……何？　その顔？」

意外、というような表情を見て、その顔はなんだ？　と思った。

「いや、別に。奥宮君、年上キラーじゃなかったのね。それにしても若い！　九歳も年下なの？」

「好きになった人が、たまたま年上が多かっただけ。年下とも普通に付き合ったことあるよ」

ため息をついて言うと、そうなの？　と言って利佐は大きなため息をついた。

「でも、そんなに下の子を好きになるとは、思わなかったわ……」

「それは……しょうがないよ……好きなんだから……」

ほんの少しそっぽを向いて言うと、利佐は、そうね、と同意してくれた。

「好きになったものはしょうがないわね。でも……極端ね、奥宮君って」

過去を知っている友達というのは本当に面倒だ。

いつも思う。柘植つげにしたってそうなのだ。

楓は気を取り直して、大好きな恋人のことを語った。

「僕の彼女は、若くて綺麗で可愛くてね。素直で明るい性格で、一目で好きになった。僕は……彼女と会う時、いつも緊張してる」

「緊張？　どうして？」

「まだ出会って間もないのに、すごく好きなんだ。彼女の前では、ありのままの自分を出せる反面、絶対に失くしたくないから緊張する。こんな気持ち、初めてだ……」

緊張すると敬語になってしまうのは自分の癖。

だが、女性相手に、こんなに緊張したのは久しぶりだった。

知れば知るほど、彼女のことを好きになる。だからこそ、いつも緊張していた。

「そんな人に出会えていいなあ」

「結婚してるくせに、何言ってるの？」

利佐は随分前に結婚していて、すでに充実した幸せを手にはしている。

楓が笑うと、利佐がやけに大きなため息をついて首を横に振った。

「私は、お見合いだもんね。お婿さんになってくれる人じゃないと、ダメだったし。ある程度は、妥協だもん」

口ではそう言いながらも、彼女が幸せなのは、一年に一回会って話すだけでも、よくわかる。「でも、結婚する時、幸せそうだった」

「今も幸せよ。子供も一人いるし」

利佐は昔から周囲に人が集まる人だった。さっぱりした性格を、好ましく思っていた。

その時、襖ふすまが開く音が聞こえて目線をそちらに向けると、着物の女性が立っている。

藍色の着物は、愛にとっても似合っていた。

「愛」

自然と笑みが浮かんでしまう。

彼女を見た瞬間、他のことが全部どうでもよくなってしまった。

我ながらどうかしていると思うほど、早く愛と話したいし一緒に食事をしたいし、何よりセックスがしたい。

さすがにセックスがしたいというのは、自分でもどうかと思うが、彼女の顔を見た途端に愛し合いたいと思ってしまったのだ。

こんなことは、今まで生きてきた中でほとんどなかった。

十代や二十代でもあるまいし、三十代の男など、とうに性欲旺盛おっつけな時は過ぎている。それどころか、ついこの前まで、楓は女性不信だったというのに。

若くて張りのある、綺麗な身体。

向けられる微笑みにさえ、男の部分を刺激される。

愛の身体を思いきり愛したい。

まるで盛りをついた動物みたいだ。こんな自分を知られたくないと思うほど、今の自分は、ただしょうもない男になっていた。

☆ ☆ ☆

好きな人の着物を着付けて、藤野屋を出たのは午前十時を少し過ぎた頃。

近場の神社へ初詣に向かいつつ、先ほどまで触れていた肌に、また触れたくなっている。それくらい、好きな人ができた。

恋をするのは、久しぶりのことだ。しかも、今までになく夢中になっている。

九歳も年下の愛の目に、三十三歳の自分はどうか映っているのか……、たまに不安になるのは年の差のせいだと思う。

それに彼女と会う時間がなかなか取れず、そのうち愛想を尽かされるのではないかと心配になる。

この前などは、急遽きんげん呼び出された仕事場に彼女を連れてきて、仕事が終わるまでの間、一人で食事をさせてしまった。

楓は参拜の後、隣で手を合わせている着物姿の愛を見る。ほどなく目を開けた彼女が、こちらを

見上げてきたので微笑んだ。

「じゃあ、初売りにでも行こうか？」

「……それ、本気だったんですか？ でも、私、持ち合わせがそんなに……」

「買い物に付き合ってもらうんだから、僕にプレゼントさせて」

でも、と躊躇う愛の手を引く。

「楓にばっかり出してもらうのは、悪い気がする」

まだ慣れないように、楓、と呼び捨ての彼女は、黒目がちな目を瞬かせた。

「じゃあ、僕からのお願い。愛に服をプレゼントさせてください」

目を伏せた愛が、微かに笑った。

その表情が可愛くて、今すぐにも抱き合いたい気持ちになる。

本当にどうしてこんなに色ボケしているのだろうか。そんな自分が嘘のようだ。

だが、愛は綺麗で一つ一つの仕草が可愛くて素直で。

一目で恋に落ちた相手だった。

緊張しながらも、言葉を駆使して口説いてよかった、と心から思う。

愛を車に乗せて、大きな商業ビルに向かった。

本当にいいのか、と聞いてくる愛に頷いて、欲しい服を選ばせる。

くるぶし丈のパンツに、ボタン付きのシャツにセーター。トラッドで可愛い恰好だ。

恐縮する愛に構わず、服に合わせてヒールの低いパンプスも購入した。

愛と出会えて良かったと心から思うと共に、愛を抱きたくて仕方がない。まるで彼女に依存しているかのようだ。

これでは、セックスが目的だと思われるかもしれない。

しかし、そうではなくて、ただ幸せがここにあると、深く繋がることで確かめたかったのだ。

買い物を済ませた後、車で楓のマンションへ向かう。

時間は午後十二時を過ぎていた。

「お腹、空いてる？」

「……大丈夫」

昨日食べすぎたし、と言って愛が微笑む。

その笑みに、欲望が刺激される。

本当に色ボケしているのしか思えない自分を反省しながらも、無意識に愛の着物の合わせ目に目がいき——

早く、と思った。

愛が草履を脱いで楓の家が上がった。

楓は靴を脱いで早々に、愛の身体を壁に押し付けた。

「え？ あ、楓……」

愛の着物の合わせ目を開いて、そこへ顔を寄せてから愛の身体を子供のように抱き上げる。

「や、楓……っ」

顔を寄せて、首筋に唇を滑らせて耳の後ろにキスをする。

そうしながら向かった先は寝室。

愛の身体をベッドの上に背から降ろす。

「楓、あの……っ」

「黙って」

自分で結んだ帯を解きながら、着物の裾を割る。衣ずれの音と共に帯が緩んで、着付けた着物がはだけていく。

着物を着る女性と付き合うのは、初めてではなかった。彼女は慣れた仕草で楓が脱がすのを手伝い、自ら腰紐を解いていたが、愛は違う。

愛は楓が脱がすのを見ながら、困惑した顔をして、時々肌に触れる手に可愛い声を出す。

強く紐を引きすぎて、愛の身体が少しだけ持ち上がったたり動いたりする。

昨夜は足袋も脱がせたけれど、今はその余裕がなかった。愛を前にすると、どうしてこんなに余裕がなくなるのかわからない。

はだけた着物の裾から見える白い足を持ち上げて、愛の下着を下げる。袂から手を入れて下着のホックを探る。外して、それを上へとずらして唇を寄せた。

「ね、楓、早い」

答えず唇を開いて愛の胸の先端を含む。

柔らかく尖ったそこを吸いながら、愛の足の間の手を伸ばした。ビクリと動く身体を上から押さえて、甘い声を聞く。

胸から唇を離し、軽く唇にキスをした楓は、スラックスのボタンを開けた。そのままジッパーを下げると、痛いくらいに張り詰めたソコが楽になる。

愛の足を持ち上げると、膝を閉じて抵抗した。

「ま……っって」

彼女の足の間はすでに潤い、指を入れるとすぐに中が蕩け始める。楓を受け入れる準備はもう充分で、愛のその反応だけで堪らなくなっていた。

「待てない」

そのまま腰を持ち上げるようにして、愛の中に楓のモノを突き入れる。

「は……」

息を吐いて、その快感に眉を寄せた。

「んん……っ！ やだ、楓……酷い」

「痛いのか？」

首を横に振る愛は、喘ぐように一度息を吐いた後、潤んだ目でじつと見てくる。  
「ひ、避妊、してな……っ」

愛の身体が欲しい気持ちに先立ってしまい、言われるまで気が付かなかった。

手を伸ばせば、脱いだ上着の中にまだコンドームがあるのに。



「ごめん、どうりで……」

気持ちいいと思った、という言葉は口に出さないのでおく。愛は、忙しく息を吐きながら、楓、と言った。

「そんなにしなかったの？ ……わ、たしと」

「大人げないくらい、君としかかった。……ごめん、一度抜くから」

わずかに腰を引くと、あん、と甘い声。

どうしてそういう声を出すのか、と思うくらい甘くて、楓の身体が反応する。無意識に腰を揺すると、息を詰めてギョツと目を閉じた愛が、顔を横に向けた。

「も、いい……楓に任せる」

「いい？」

「だって……楓……っあ！」

今度はしっかりと腰を動かして愛の身体を揺らす。

唇を噛みしめて声を我慢する仕草が可愛い。でも堪えきれなくて細く小さく出す声や、耐えきれずに大きく出る声も可愛い。

熱に浮かされたように、何度も腰を揺らした。

たとえゴムなしでいいと言われても、これまで必ず避妊をしていたのに。

情欲を抑えきれずに避妊を忘れるなんて、愛としか経験したことがなかった。

愛の身体を抱きしめながら腰を動かして、熱く重い息を吐き出す。

「気持ちいい、愛」

頬にキスをして、首筋に顔を埋めて、そうしてから身体を起こす。

可愛い胸に触れて揉み上げながら、着物の前を全て開く。

もう、限界が近いから。

限界がくるのが早すぎるけれど、そんなことは構わなかった。彼女もまた楓と同じくらい感じ入った顔をして、甘い声で名を呼ぶ。

「楓……っ」

強く腰を動かすと堪らないという風に、愛が首を横に振った。

もうだめ、という言葉が昨日も聞いた気がする。

込み上げる衝動のまま深く腰を突き入れた直後、自身を愛から引き抜いた。

「……っは……あ」

呻くように息を吐いて、愛の腹の上に欲望を解放した。

今まで交際経験がないという愛は、楓しか男を知らない。なのに、抱きたい気持ちを抑えきれず、一方的に行為を進めてしまった。

さすがに、酷いことをしている気がする。成人した大人の女性とはいえ、愛はまだセックスの経験自体がそんなにないのに。

彼女の腹部の上に散っている自分の放ったものを見て、愛にはこんなことをしたくなかったと反省するが。

やってしまったものはしょうがない。愛が好きすぎて。どうしようもなく。

「ごめん。今、拭くから」  
手を伸ばして、ティッシュを取った。愛の腹の上に散ったものを拭いていると、ここ、と愛が指をさす。

「肩まで飛んできた……着物、無事？」

彼女の肩にも楓の放ったものが飛んでいた。それを拭き取って愛の身体を起こしてやる。

「……ああ、無事」

きちんと脱がせる前に始めてしまったが、奇跡的に汚さずに済んだことにホッとする。

「下着にもついてない……ごめん、元気がよすぎたかな……」

愛の肩から着物を落とすと、綺麗な黒い瞳が楓を見る。

「楓、エッチだ。言うことも、することも全部。なんか……今の着物脱がせる感じも……ほんとに、もう、恥ずかしくて照れるし……こんなの無理」

顔を赤くした愛は、俯いて、口元に手を当てる。肩から落とした着物を胸元へかき寄せて、楓から少し距離を取るように後ずさった。

「ごめん……でも、こんな風に抱くのは、僕も初めてで」

これで、セックスが無理になったら非常に困る。

今日のセックスが原因で、今後したくないと言われたらどうしよう。

「だって、友達同士のし、下ネタだって苦手なのに、元気よすぎたとか言うし。そういうの言わ

れたら……恥ずかしい。なのに気持ちいいとか、困る。どう反応すればいいの？」

そう言っつて、さらに後ずさろうとする身体を捕まえる。

「ごめんね。でも、本当に良かった」

そつと抱きしめると、愛が背中にゆっくりと手を回す。

「良くなかった？ 愛も、感じていたと思うけど」

楓が言うと、胸に頬を寄せて抱きしめる力が増した。

「感想は、まだ、待って」

胸から頬を離して楓を見上げる。赤い顔も言われた内容も可愛い。

どうしてこんな可愛い子が、今まで誰とも付き合わずにいられたんだか。

他の男に愛される前でよかった。彼女の初めてが自分でよかった。

赤い顔をしている愛の唇にキスを落として、少しずつ深くしていく。

応えてくれる舌を追って、抱きしめる腕に力を入れて。

「いながらいくつなんだ、と年齢を考える。そして自分にも、まだこんなに性欲があったのか、とも思った。」

「好きだ、愛……好きだよ」

愛の手が楓の髪の毛に絡まる。そして撫でて、楓の目をじっと見る。

「楓の髪、柔らかくて気持ちいい」

「そう？ 唇は気持ち良くない？」

そうやって、彼女の頬にキスをする。

「え？」

「愛に触れる僕の手は？ 気持ち良くない？」

頬が赤くなる愛を見て、自分は本当に彼女に愛されているのだと確信する。

今日は病的なほど求めてしまった自覚がある。でも、愛はそんな楓を受け入れてくれた。

それが、楓にとって何より嬉しかった。

「や、あの、楓の髪の毛は猫みたいで……」

困ったようにそう言う愛に微笑み、楓は放っていた上着に手を伸ばす。

ポケットからゴムを取り出し、パッケージを破る。

愛は何も言わず、ただそれを見ていた。楓も何も言わない。

早く、愛と繋がりがりたかった。

太腿を撫でて、両手で彼女の膝を開く。

愛は抵抗することなく、楓を自分の内側に受け入れた。

「あ……んう」

ゆっくりと愛の中に張り詰めたモノを埋めていく。奥に進むにつれ、濡れた音が聞こえた。

腰を揺らしながら、愛の首筋にキスをし、耳の後ろにもキスをした。

楓の首に手を回してしがみつくと、ぴつたりと身体を密着させる。

好きな人と抱き合う幸福は久しぶりだった。

それゆえに、これ以上ないくらい感情が溢れて仕方なかった。

約束の時間の午後八時まで、あと三時間半。

時計を見た楓は、ため息をつく。

隣で寝ている愛は、まだ夢の中のように、目を閉じたまま。

それを見て微笑み、彼女を起こさないようそっと起き上がる。そこで、スーツの上着からスマホの着信音が聞こえた。急いで床に放っていた上着を拾って、寝室を出る。

ドアを閉める時にベッドの上を窺い、眠ったままの愛にホッとした。

下着だけ身につけた恰好で、着信相手を確認する。

仕事用のスマホに、知らない電話番号が表示されていた。相手が誰かわからなくても、仕事用の携帯にかかってきた電話に出ないわけにはいかない。

「はい、奥宮です」

「楓……君？」

仕事相手にも、自分を楓と呼び捨てる人はいる。だが、まったく知らない女性の声だったので、聞き返した。

「……はい……楓ですが、どなたですか？」

『藤野、利衣子よ』

藤野利衣子——利佐の姉で、楓の初めての相手で、かつて不倫していた人。

大学時代、初めて藤野屋で利佐に紹介してもらった時は、特になんとも思わなかった。けれど、二度三度と会い、会話をするうちに意気投合し、気持ちが盛り上がっていた。

利佐の姉ということもあり、利佐に隠れて逢瀬を重ねる状況が、まだ若かった楓の気持ちをより盛り上げたのかもしれない。

藤野屋の土間で、場所も考えずに利衣子を抱き寄せてキスをして、その日のうちに一線を越えた。けれど、ラブホテルで利衣子と済ませた後、彼女は楓の目の前で左手の薬指にマリッジリングを嵌めて見せた。

『ごめんなさい楓君、結婚してるの、私』

それまで、楓と会う時はずっと外していたマリッジリング。

寝た後に指輪を身に着けた彼女に対して、その時は騙されたという怒りよりも、相手を許す気持ちの方が勝った。好きだったから。

それから三ヶ月、利衣子とは不倫関係が続けた。だが、今は後悔しかない。

藤野屋に行くのは一年に一回だけと決め、これまで泊まることはなかったのは、利衣子との不毛な恋を思い出すから。

しかし、今の楓の隣には愛がいる。そして、利衣子への気持ちが愛に対する気持ちと違うことがよくわかった。

昔の恋を反芻しても、ただただ愛への気持ちが募るだけ。

愛との恋が本当に幸福だと、より深いものだと言確認する。

心のどこかに、ずっと引つかかっていた利衣子との強すぎる思い出を、愛との幸せな思い出で塗り替えるために、藤野屋に泊まったのかも、と思う。

おかげで、今の恋がかげがえのないたった一つのものだと、本気で向き合うことができた。「どうされました?」

なんで彼女がこの番号に電話をしてくるのかと、迷惑な気持ちを隠さない声を出す。

『随分、他人行儀ね。それが普通だけど…昨日は、綺麗な彼女とウチに泊まったんでしょう?』

「…：…用件はなんでしょう? これはビジネス用の携帯なので、私用の電話は困ります」

『わかってはいるけれど、頼みたいことがあったの』

「利衣子さんからの頼み事は、一切、聞きません」

「利衣子と別れる時、酷く辛かった。」

——夫の転勤について行くの。お腹に彼の子がいて、ちゃんと向き合うことができたわ。やっぱり、夫を愛している。本当にごめんなさい。

最後の日、彼女は楓にそう言った。でも、今はそれでよかったと思う。

年を重ねるにつれ、かつての自分を省みることができるようになった。結局のところ、利衣子という人は、自分勝手な人なのだ。

それが薄々わかっていながら、夫のいる彼女と何度も会って、セックスをしていた。

今となっては、過去の自分は、いったい何をしていただろうと思う。当時の楓は若く、大人の

女性の女らしい言葉や仕草に勝てなかった。

そんな自分の弱さを思い出すたび、今でも頭にくることがある。  
自分のことしか考えないような人の事情は、もう自分には関係ない。

二度と、彼女の頼み事など聞きたくはなかった。

『待って。頼みたいことは、藤野屋のことなの……』

「藤野屋？」

藤野屋の名前に、つい聞き返してしまうと、昔と変わらない、どこか儂はかなげな声が言葉が続けた。

『融資をしてほしいの。楓君、大きな会社の社長だつて聞いたわ。……利佐は、若女将わかおかみとして弱みを見せまいと肩肘を張ってるけど、実際は藤野屋の内情は火の車で……お願い』

とうの昔に別れて縁を切っている相手に、こうやって電話をかけてくる強したたさは変わらない。言  
い方を変えれば、ズルい人だ。

「本当に融資が必要なら、利佐が自分で申し込んでくるべきです。利佐が何も言わない以上、僕か  
らは何もしません」

『……冷たくなっちゃったわね』

「お言葉ですが、僕は変わっていません。失礼します」

相手の返事を待たずに電話を切った。

リビングのテーブルにスマホを放り投げると、テーブルの上でスマホがひっくり返る。

「どうやって僕の番号を……ああ、宿泊台帳か……」

個人情報の管理はどうなってるんだ、と思いながら、乱暴に髪の毛を掻き上げる。

愛が柔らかくて気持ちいい、と言って触れていたことを思い出し、足早に寝室へ行く。

まだ寝ている愛に、今の話を聞かれなくてよかったと、ホッとする。

シャワーを浴びさせて、約束の前に愛をマンションまで送って……

それらを考えると、そろそろ起こした方がいいかもしれない。眠る彼女の傍へ行き、可愛い寝顔  
に触れてから、その首筋に顔を埋める。

「愛、起きて」

楓が耳元で言うと、微かに身じろぎした。

さらりと髪が頬を滑り落ちるのが魅力的だった。

「起きて、愛」

頬と首筋に触れて、唇にキスをする。うつすらと目を開けた愛が瞬またきをして、楓、と呼んだ。

可愛くて愛しい人。

「シャワー浴びようか？ 一緒に行く？」

寝ぼけているのか、何も纏まとわず起き上がった愛の、綺麗な胸に触りたくなる。

ようやく裸だと気付いた彼女が、赤い顔で布団を引き寄せた。そんな初々ついでしい彼女に、無性に惹  
かれている。

こうしてずっと、二人で幸せな時間を過ごしていきたい。

そう思った。

「しばらく見ないうちに、なんだか色っぽくなった気がするよ？ 愛」

「え？ なんのこと？」

友達の美晴が訪ねてきて、急遽泊まっていくことになった。

二人ともシャワーを浴びて、のんびりとしていたところでそう言われたので、ちょっとだけうろたえる。

今日は一月二日。初めて実家以外で正月を過ごしている。

昨日と今日の夕方までは、初めてできた彼といた。和風料亭の旅館になっている離れに泊まり、その後、彼の家で過ごした。

年末からあまり会っていないなかった美晴は、愛の微妙な変化を感じ取ったのだろうか。

「なんのこと、じゃないよ。愛、あのイケメン彼氏としたんじゃないの？ なんか前に会った時と雰囲気が違うし……」

意味深に笑いながらそう言われて、すぐに否定はできなかった。

「雰囲気って何よ、もう……」

曖昧に返事をしただけで肯定はしなかったが、愛の表情や声のトーンでわかつたらしい。美晴は、

そうか、という顔をして口を開く。

「脱バージンか。痛かったんじゃない？ あの人の大きそうだしね」

卑猥なことを口にしなから、ふふつ、と笑う。そうやって、エッチな話に持っていかれると困る。だが美晴は、性関係に対してわりとオープンなのだ。

「……美晴、私その手の話題苦手なのに」

「でも、したんでしょ？」

迫るように愛に身体を近づけ、真剣な顔をする。

「……ま、はい、しましたけれども」

なんで雰囲気くらいでわかるのかな、と思いながら、愛は赤い顔をしてほんの少し横を向いた。

「痛かった？」

間髪を容れずに聞いてくる彼女に、多少ムツとしながら愛は答えた。

「軽く痛かったって言えないほど、痛かったけど！」

あまり突っ込んで聞かれると嫌なのはわかっているくせに、と愛は唇を尖らせる。

「ごめん、ごめん……愛がこの手の話嫌いなもの知ってるよ？ でも、私は聞きたいし、こういう話をするのが好きなの。そっか、そうよね……お初は痛いよね」

ニヤニヤ笑いながら美晴はそう言った。

こういうガールズトークは本当に苦手だ。しかし、美晴としては、友達だから聞きたいし話せるという気持ちもあるのだろう。

「いいなあ、ああいうイケメンが初めてで……で、アレ大きかったかな？」

結局はそこに行きつくらしい。

「見たんでしよう、彼のアレ」

「見、たけど、楓のしか見たことないし」

比べようにも比べられない。愛は楓としか経験がないし、ソレのサイズについて聞かれてもわからない。

大きかったか、と聞かれても……と、楓のモノを思い出す。

そこでハッと我に返り、頭の中からそれを追い出した。

「へー、彼、カエデって言うんだ？ しかもいつの間にか呼び捨て？ この間まで奥宮さんだったのに」

確かに彼女の言う通り、呼び方が変わった。

改めて指摘されると、なんとなく照れてしまう。

奥宮という苗字呼びから楓、と名前呼びになった。彼がそうしてほしいと望んだのもあるが、もうすでに愛の中でも彼を名前で呼ぶことが普通となりつつある。

「美晴、からかわないですよ！」

頬を膨らませると美晴は、だつて、と笑う。

「愛、本当に女になつてるんだもん。雰囲気全然違うよ？ この前まで、色気なんかなかったのに、今はあるんだからね」

色気と言われて、顔が熱くなる。

顔が赤くなった愛を見て、また美晴がニヤニヤ笑いを浮かべるのを無視した。

「……そう？」

顔を俯うつむけながらそう言うと、美晴は愛の顔を指先で上げさせる。

「うん。だから、彼としたんだな、って思ったんだけど。ま、初めてだから、きつかったでしょうけどね。サイズも大きそうだし」

またそっちの方向へ持つていく、と心の中でげんなりした。

比べようがないけれど、確かに楓のモノは大きかったと思う。あんな大きなモノ入らない、って思つたくらいには。

それに、きつかったというよりも痛かった。

けれど、二回目からは少しピリツとしたくらいで、そこまで痛みはなかった。愛の身体が彼を覚えてしまったからか、裸で抱き合うことへの抵抗が薄れたのかもしれない。

昨日の夜も抱き合つて、今日も抱き合つた。彼の約束の時間ギリギリまで。

さすがに疲れて、愛はマンションへ送ってもらう車の中で眠ってしまった。でもそれは心地よいだるさで、車内だというのに充実した睡眠だった。

マンションの部屋に入ると、すぐにベッドに横になり、さつきまで眠っていた。今も身体中に倦怠感たいかんと、まだ楓が愛の中にいるような感覚が残っている。

楓から求められ、それに応こたえる。愛は、短期間でここまで自分が変わってしまったことに、驚い

ていた。

この前まではキスもセックスも、何も知らなかったのに。

今では自分からキスを求め、楓の身体を抱きしめる。行為の間、何度も彼の名を呼んだのを覚えていた。

「痛かったし、確かにきつかったけど……それよりも、彼といると私、なんだか今までの自分じゃなくなるみたいで」

ポツリとそう呟く愛に、美晴はフツと笑った。

「変わってもいいじゃん、彼とのエッチ、嫌いじゃなさそうだし。何回もするといいよ。そのうち彼の弱いところ見つけてそこを攻めてやったりして」

彼女はそう言っ、ふふっ、と楽しそうに笑った。

美晴は前からエッチなことに関しては楽観的。それに、今の彼と上手うまくいつてるから、気持ちに余裕があるのかもしれない。

たぶん、もうすぐ結婚するだろう美晴を見ていると、愛も、これくらい素直に気持ちを表現できたらな、と思う。

「明日はね、彼の親しい人たちを集めて、ロックメイブルの本店でニューイヤーパーティーをするんだって」

話題を変えようと思い、愛は明日のことを話す。

楓は会社の創立メンバーと親しい友人だけを集めて、パーティーを開くらしい。愛もおいで、と

言われたので、思い切って行くことにした。

「ロックメイブル本店かあ、私も行ってみたいなあ……カジュアルな感じなのかな？」

うらましいといった顔をしている美晴は、自分も来たそうだった。

「一緒に行つていいか、楓に聞いてみようか？」

「ほんと!? いいの?」

身を乗り出して嬉しそうにする彼女に頷く。

「メールしてみる。美晴、会社いつまで休み？」

「明日まで。でも遅くならないように帰ればいいし。愛は五日まで休みなんですよ？」

けれど、先輩の中には正月も休まずに、添乗員として働いている社員もいる。

愛が勤めているのは、エールトラベラーズという旅行代理店だ。そのうち愛も、添乗員として正月は休まず働く日がくるかもしれない。

だが、しばらくは事務仕事や先輩の補佐が中心だろう。

「うん。私はまだ仕事を一人で任せてもらえないから。でも、先輩は……添乗員としてお正月は外国で、つて人も多いよ。その人たちは、後でちゃんと休んでるけど」

そう言いながら楓にメールをする。

楓は常時、仕事用とプライベート用のスマホを持っている。愛は楓の、プライベート用の連絡先だけ教えてもらっていた。

頻繁ひんぱんにかかってくるのはやはり仕事用らしいが、どちらに電話がかかってくるのか、わから



ない時があるという。

楓らしくて、愛はそのエピソードを聞いた時、微笑ましく思った。

SNSで友達と一緒に連れて行っていいか聞いてみると、しばらくして楓から返事が届く。

「来ていいよ、だって」

「やった！ お酒飲めるー！ 楽しみ！」

「会費は二千円だって。いい？」

「全然！ 二千円なんて安いし！」

本当に楽しみ、という笑顔を浮かべる彼女を見て、愛もニューイヤーパーティーが楽しみになった。

もう明日のことだが、今日だったらしいのに、と思うのは愛が変わった証拠だ。

今日別れたばかりの楓に、もう、会いたいと思う。

明日がとても楽しみだった。

楓に会える時間が、愛にとってはかけがえのないものへと、変化していくのを感じた。

☆☆☆

——ニューイヤーパーティー当日。

ロックメイプル本店のドアを開けると、すでにパーティーは始まっていた。

軽く流れている音楽と、雑談の声。

少し遅くなったのは、昼間、彼氏と会っていた美晴が、待ち合わせに遅れたからだだった。

「なんかみんなオシャレね」

美晴は周りを見てそう言った。パーティーに来ている人たちの中には、ハーフっぽい外見の人も多くいる。

愛と美晴は、カジュアルな服装でいいと言われたので、ほんの少しオシャレをしてきた。

しかし、自分たちの恰好が浮いて感じるほど、みんなオシャレで素敵だったのだ。

「ちよっと場違いな感じがする」

そう言って緩く笑った美晴に、そうだね、と愛も同意する。

「みんな、綺麗な恰好してるね。芸能人みたい」

「そうだねー……」

今更、服を替えようがないので、愛は小さくため息をついて肩を落とす。

ところで楓は、と探すと立ったまま談笑していた。その姿は赤いネクタイに黒のベスト、黒のロングエプロン。

カウンターの中间にいるロックメイプルのスタッフ二人も同じ恰好だった。

愛に気付いた楓は手を振って、こちらに近づいてくる。そうして、手でカウンターを示した。

「いらっしやい」

カウンターに移動しながら、彼に美晴を紹介するために口を開きかける。しかし楓が先に美晴に

声をかけた。

「あなたが愛の友達？ お名前を教えてください」

いつもの王子様スマイルは、美晴の心も溶かしたらしく、いい笑顔。

それを見て、王子様スマイルを安売りしないでほしい、とモヤモヤした。楓の魅力的な笑顔は、愛だけに向けてほしいと思ってしまう。

「愛の友達の青木美晴です。今日はよろしくお願ひします。……ここ、すごく雰囲気がいいですね……それに、なんかカッコイイです、みんなオシヤレだし」

美晴は会釈をしつつ、店の感想を素直に口にします。

相変わらずコミュニケーション能力が高いなあ、と感心した。

「ありがとうございます。僕は今日スタッフだから、あまりお相手はできないけど、どうぞ楽しんでいってください」

そう言っつて一度カウンターに入って、愛と美晴におしぼりを手渡す。

「楓が、スタッフなの？」

確かにスタッフの恰好をしているが、それはまったく聞いていなかった。

「そう、僕が毎年もてなす係。たまには社員をもてなさない」と

飲み物は、と聞いてきたのは岸本だった。以前、愛にグラタンを作ってくれた人だ。

「お久しぶりです……岸本さん、でしたよね？」

「はい、覚えていてくださって光栄です……お二人とも、お飲み物はアルコール入りでよろしいで

すか？」

岸本の問いに、美晴がすぐに、もちろん、と答えた。

「私は軽めのアルコール入りで……愛も同じ感じでいいよね？」

「うん」

かしこまりました、と言った岸本がグラスを手に取り用意し始めた。

「愛ちゃんの飲み物は俺が作るうか？ 楓」

そう言ったのは、確か芦屋という名前の、壮年のカッコイイ男の人。

「すみません、頼みます。あっちのうるさい子たちの相手をしないと、今後の仕事に支障をきたすので」

一緒にいるのに楓と話せないのかと、内心がっかりしてしまった。

でも、ずっとそうではないだろうから、と気を取り直す。

よろしくお願ひします、と芦屋に言った後、彼が愛に視線を移し、綺麗な目がにこりと笑う。

「ごめんね、愛。少し相手したら、戻ってくるから」

カウンターから手を伸ばして、愛の頭を撫でる。そうしてカウンターを出て行った彼を、つい目で追ってしまった。

綺麗な女性たちがこちらを見て、それから楓を見ている。愛は慌てて視線を逸らして、何がいい？ と聞いた低い声に顔を上げた。

「愛ちゃんとその友達、何がいい？ 軽めのアルコール入りだったら、なんでもいいかな？」